

<前回>エコロジーの神学1**(1) エコロジーの神学の成立と展開**

「今世紀初めの数十年にわたり、キリスト教の擁護論者たちは科学と技術がともにキリスト教を母体にしてできたものであることを立証したいと特に熱望した。・・・ところが皮肉にも、このキリスト教が今や極悪非道な技術の生みの親として非難の矢面に立たされているのである。」(J・パスモア『自然に対する人間の責任』岩波書店、16頁)

環境学の現状

環境危機は、人類が直面している最大の問題の一つであり、環境学は自然科学から人文社会科学まで多くの学問分野を包括する仕方でも進展しつつある。

環境学の広がりには、二つの岩波講座『地球環境学』(全10巻、1998-99年)と『環境経済・政策学』(全8巻、2002-2003年)などから確認することができる。たとえば、加藤尚武は、多岐にわたる環境倫理の問題を、自然の生存権の問題、世代間倫理の問題、地球全体主義の三つとしてまとめているが(加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー)、「地球の生態系が閉じた有限な世界である」という地球全体主義の認識は、この有限性の内部における資源とエネルギー(そしてゴミ処理や二酸化炭素排出など)の配分とその正義という問題の解決を要求する。この正義の配分をめぐる利害対立こそが、地球規模の環境論的合意形成を妨げている南北問題の核心を成しており、したがって環境問題を真剣に考えるとき、政治と経済の問題は避けて通れないことになる。

「環境の神学」の歴史

キリスト教思想における環境論の取り組みについて、その歴史を概観しておこう。キリスト教における本格的な環境論は、現実の環境危機が進展する中、いわば外部からの問題提起によって開始された。リン・ホワイトは、論文「現在の生態学的危機の歴史的起源」(1967年、『機械と神——生態学的危機の歴史的起源』みすず書房、に所収)において、キリスト教がユダヤ教から受け継いだ「創造物語」と、そこに現れた「人間中心主義」が「人間が自分のため自然を搾取する」ことを正当化したという問題提起を行った。

<まとめ>

Dieter T. Hessel, Rosemary Radford Ruether,

Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans, Harvard University Press, 2000.

「創造論から終末論へ」: 1960～80年代 → 1980年代以降

Q1: 聖書・キリスト教は環境破壊の原因か。両者の関連性はいかなるものか。

Q2: 聖書・キリスト教は環境破壊の克服にいかに関与するか。

David G. Horrell, Cheryl Hunt, and Christopher Southgate,

Greening Paul. Rereading the Apostle in a Time of Ecological Crisis, Baylor University Press, 2010.

David G. Horrell, Cheryl Hunt, Christopher Southgate, and Francesco Stavrakopoulou,

Ecological Hermeneutics. Biblical, Historical and Theological Perspectives, T & T Clark, 2010.

「聖書テキストから神学へ」: 2000年代以降

Q3: 聖書の環境論をキリスト教思想全般(教義学から倫理学まで、組織神学から実践神学まで)へといかにして接続するのか。

媒介領域としての、環境論・環境思想、歴史神学。

(2) 聖書の創造論・終末論

ヒーバート／キャサリン・ケラー、バーバラ・ロッシング

<聖書テキスト → 言語の問題 → 環境の神学>

1. メタファー・モデル・ヴィジョン → 構想力と人間存在(言葉・存在／行為)

- ・メタファーとモデル：装飾ではなく認知・経験の形態
- ・人格モデル・非人格モデル
 - 男性モデル・女性モデル
 - 人間の使命（自然との関わりにおける人間）
 - 地の支配と地の僕
- 2. 個と共同体とをつなぐ理論はいかにして可能か？ 社会的構想力、ヴィジョンの共有とは？
 - ・経験—メタファー・モデル・ヴィジョン—概念・体系的思惟
 - |
 - 倫理・行動

3. テキストの読解に即して。聖書読解の新しい形。

(3) メタファー論

1. 新しい理論によって乗り越えられるべき古い隠喩論（ギリシアのソフィストに始まり、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスをへて、19世紀のレトリックについての論考において終わり告げた伝統）を次のようにまとめている（リクール, c, 76f.）。
2. 新しい隠喩論は、隠喩を言葉のレベルにおける意味の逸脱としてではなく、文のレベルにおいて可能になる隠喩表現をめぐる複数の解釈の葛藤（相互作用）から可能になる新しい意味論的な革新の問題として捉える試みである。
 - 「である」と「ではない」の一義的な確定ではなく、二つの判断の葛藤
 - 「～として見る」「として経験する」「としてある」
3. レイコフ：「隠喩は詩人だけのものではない。それは日常言語に内在し、生、死、時といった抽象概念を把握するための主要な方法なのである」（レイコフ、1994、62）。
 - とくに科学言語における隠喩論が示すように、隠喩は科学における発見の論理に属している。「源泉領域から目標領域への写像」（「人生＝旅」「神＝父」「時間＝お金」）
4. 隠喩は、優れて現実の認知・認識（思想と経験の方法・あり方）に関わる問題であり、人間の日常的現実性の中心に位置するのである。
5. 「私は命のパンである」（ヨハネ 6:22 ～ 59）：イエスについてのヨセフの息子（肉体と持った人間）とパンという語の意味の多義性ではなく、イエスをについての二つの解釈・見方の衝突による意味のよじれと、それによって引き起こされる永遠の命をめぐるイエスの出来事についての新しい意味の生成である。こうして、パンとイエスの間に写像が構成され、イエスについての一連の認知が可能になるのである。
6. 隠喩の指示(Reference/Bedeutung)。隠喩的表現と特徴づけられた宗教言語が、指示を持ちうるのか、あるいはその指示対象とはいかなる実在性を有するのか、という問いは、神学的実在論の最重要問題に他ならない。たとえば、イエスの「神の国の譬え」。
 - 言語の指示とは、記号体系外部とその記号との関係。つまり、指示において問題となるのは、記号が自己完結的な存在ではなく、その外部を有すること。
7. 宗教言語、とくにその隠喩的表現とは？
 - ・指示対象がいれば存在しない、あるいはその存在は重要ではない、という主張。
 - 構造主義、あるいは詩的機能＝自己指示性（ヤコブソン）
 - ブルトマンの非神話論化：実在への指示から実存的決断の呼びかけへ
 - 神話・世界観 信仰・主体性
8. 隠喩における指示の二重性（リクール）
 - 隠喩論：隠喩の意味と指示
 - 文・言明・判断・解釈のレベルの言語現象
 - 字義的な解釈と新しい別の解釈との葛藤・相互作用

- 意味のよじれ、新しい意味の生成
- 第一度の指示の中断
- 第二度の指示の生成
- 隠喩・テキストが開示する世界・実在 (テキスト世界)

新しい世界内的な存在の可能性・経験の拡張

宗教的リアリティとはいかなるリアリティか。

9. 第二度の指示の指示対象：実在の日常的イメージの模倣ではなく、実在の新しい解釈・見方の開示であり、前方へと投影され再構成された実在。「神の国」の現実性とは。
- ・ブルトマン学派における「言葉の出来事」

言葉の出来事 (Sprachereignis, Wortgeschehen) → 正典・靈感とは何か。動的靈感説。

10. 人間の日常性事態が隠喩的構造を有するとすれば、虚構と現実の二分法も廃棄されねばならなくなる。では、真理の基準とは何か。歴史に対する文学の優位 (アリストテレス)。

11. レトリックの諸形態と認知あるいは思考方法

隠喩 (類似関係) — 換喩 (metonymy、現実世界での隣接関係、空間と時間)

— 提喩 (synecdoche、意味世界での包含関係、類と種)

- ・瀬戸賢一『レトリックの宇宙』(海鳴社)、『レトリックの知——意味のアルケオロジーを求めて』(新曜社)

4. エコロジーの神学 2

(1) メタファー論

(2) モデル論

1. 言語世界／心的世界／実在世界 (日常性・生活世界など) ／宗教言語の指示世界における隠喩、モデルの位置づけ。

語／隠喩／テキスト：言語の諸階層 1 → 連辞

隠喩／モデル：言語の諸階層 2 → 範列

↓

- ・ syntagm (連辞) <metaphor-narrative> → パロール → 諸要素の結合規則とその構造
線的、連鎖的な言述順序。テキストは全体として連辞と見なされる。連辞内の諸要素が、前後の諸要素との関係でそれぞれの価値を獲得する。

- ・ paradigm (範列) <metaphor-model> → ラング

特定の構造によって特徴付けられた体系内の他の諸要素との関係。テキストはこの体系に属する諸要素の部分的な表出。所与の体系に所属する諸要素の集積が範列。

2. モデル：隠喩を構成要素として成立する上位の構造体。隠喩から構成されるの範列的秩序。モデルは、根底的隠喩 (root metaphor) を核として、その周りに類似した隠喩を結合している。一定の隠喩表現を核としてその回りに構成された隣接する隠喩群・隠喩群のネットワーク。

3. Ricoeur, *Biblical interpretation*

Max Black, *Models and Metaphors. Studies in language and philosophy*, New York, 1962.

Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.

4. モデルの特性として

- ①モデルの複数性 (まず現象学的に確認・記述され、次に理論的に<存在論的に>相互に位置づけられ関連づけられる)

- ②モデルの複数性 → 神経験の複数性

モデル・レベルの非排他性・相補性 (多様性の承認) と概念レベルの排他性

cf: 人格と非人格 (ヒック)

- ③キリスト教の伝統的な「神のモデル」の複数性と基本的性格 (男性モデル)
5. 神モデル: 人格モデル / 非人格モデル
男性モデル / 女性モデル
王モデル/父モデル
6. 人間モデル (自然との関わりにおける): 「地の支配者」と「地の僕」
→ 人間の实践領域・倫理

(3) エコ・フェミニズムからケアの倫理へ——マクフェイグの場合

Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.

, *The Body of God. An Ecological Theology*, Fortress, 1993.

, *Super, Natural Christians. How we should love nature*, Fortress, 1997,

1. モデル→思想と倫理 (概念と実践)

- ・ 伝統的モデルと新しいモデル

The Monarchical Model

The World as God's body

we have been given central responsibility to care for God's body, our world. (1987, 73)

The immanence of God in the world implied in our metaphor raises the question of God's involvement with evil. (74)

- ・ 神モデル: 母、愛する者、友→三重の愛

To say that God is present in the world as mother, lover, and friend of the last and least in all creation is to characterize the Christian gospel as radical, surprising love. (91)

All three loves --- creative, salvific, and sustaining --- are united in that each points to a desire for union.

Creative love (or agape), Salvific love (or eros), sustaining love (or philia)

Justice (agape), healing (eros), companionship (philia)

2. モデルに基づく生の形態化→実践

A Christian lifestyle modeled on God as parent, lover, and friend

The Love of God as Mother: Agape

The Activity of God as Mother: Creating, Sophia / Logos

The Ethic of God as Mother: Justice, an ethic of care, justice through care

3. 自然の神学: 神学的な自然理解→自然観の転換

- (1) 新しい感受性へ: 構想力 (Einbildungskraft) のレベルでの転換から、存在 (Sein) のレベルでの転換へ

A new shape for humanity, a new way of being in the world

We are as members of God's body qualified by the liberating, healing, and inclusive love of Christ. (1993, 197)

to change consciousness, to develop a new sensibility,

thinking differently, behave differently

each model contains within itself a way of being in the world. (203)

- (2) 創造の善性: 人間から被造物全体へ拡張

My suggestion is that we should relate to the entities in nature in the same basic way that we are supposed to relate to God and other people.

We read in Genesis that God looked at creation and said: "It is good"---- not good for people or even for God, but just good. We should say the same thing. If we did so, we would

simply be extending Christianity's own most basic model, the subject-subjects one, to nature.
(1997,1)

The ecological model says that the self only exist in radical interrelationship and interdependence with other and that all living and nonliving entities exist somewhere on this continuum. In other words, everything is in some sense a "subject" ---- an entity that has a center, a focus, an intention in itself, for itself (often an unconscious one), but it also at the same time in radical relationship with others. (2)

The basic model in the West for understanding self, world, and God has been "subject" versus "object." Whatever we know, we know by means of this model: I am the subject knowing the world (nature), other people, and God as objects.

nature has become the object par excellence. nothing but object (7)

hierarchical dualisms: male / female, straight / gay, whites / people of color,
Westerners / Easterners

The first named is the subject, the second the object.

Objects are "things" (8)

西欧ヒューマニズムの功績と限界、たとえばカントはどこに位置するか。

(3) 「自然」とは？ 自然の問題は自然観の問題となる。

If "Christian" has many meanings, "nature" has more.

there will be many views of what nature is, depending on different historical, cultural, geographical, political. economic, and personal contexts.

In other words, nature is not one thing, but many things. (17)

nature is constructed by us. (20)

the big answer, the worldview

the medieval picture, the Newtonian view of nature, ecological model

the ecological, evolutionary
understanding of nature

the small answer, nature in the near neighbor

(23)

Im sum, a Christian nature spirituality is Christian praxis extended to nature. It is becoming sensitive to the natural world, acknowledging that we live in this relationship as we do also in the relationships with God and other people. It means extending the way we respond to God and other people --- as subjects and not as objects --- to the natural world.

as valuable in itself, as a "subject" (25)

subject-object & subject-subjects

(4) 注意と愛

Simone Weil deepens the meaning of pay attention with her comment that "absolute attention is prayer."

We are asking the question, how should a Christian love nature ? The answer emerging is that we must pay attention --- detailed, careful, concrete attention --- to the world that lies around us but is not us.

We must, as Murdoch says, try to see "the world as it is " in order to love it. To really love nature, we must pay attention to it. Love and knowledge go together; we can't have the one without the other. (29)

I would like to suggest that a branch of science, nature writing, can help us learn to pay attention. The kind of paying attention that one sees in good nature writing suggests a paradigm

for us. Nature writing is not scientific writing that hides behind pseudo-objectivity; rather, it combines acute, careful observation with a kind of loving empathy for and delight in its object.

It is a knowing that is infused with loving, a love that wants to know more.

(5) 二つの目（視線）のあり方

two very different ways of seeing the world (30)

Seeing Ellery and seeing the earth from space: behind these two very different ways of seeing,

of paying attention, lie two different ways of knowing: what one commentator calls "the loving eye" versus "the arrogant eye." (32)

The arrogant eye simplifies in order to control, denying complexity, since it cannot control what it cannot understand. (33)

good for me and their human beings

The loving eye is not the opposite of the arrogant eye: it does not substitute self-denial, romantic fusion, and subservience for distance, objectification, and exploitation. Rather it suggests something novel in Western ways of knowing: acknowledgement of and respect for the other as subject. (34)

the distant eye, the arrogant eye, the eye that can objectify the world. This eye lies behind the Western scientific understanding of objectivity.

Feminists and others have criticized this view of objectivity, seeing it as a mask for Western male privilege as well as for technological exploitation of women and nature. (36)

practicing the loving eyes, that is, recognizing the reality of things apart from the self and appreciating them in their specialness and distinctiveness, is a critical first step.

it suggests a different basic sensibility for all our knowing and doing and a different kind of knowing and doing. (37)

(6) ケア倫理：権利とケア

an environmental ethic of care

A rights ethic seeks to extend the rights accorded to human beings since the Enlightenment --- the right to "life, liberty, and the pursuit of happiness --- to all animals and even forests, oceans, and other elements of the ecosystems. A rights ethic functions on the model of the solitary human individual.

A care ethic is based on the models of subjects in relationship, although the subjects are not necessarily all human ones and the burden of ethical responsibility can fall unequally. The language of care --- interest, concern, respect, nurture, paying attention, empathy, relationality --- seems more appropriate for human interaction with natural world, for engendering helpful attitudes toward the environment, than does the rights ethic. (40)

It appears to be, for Jesus is reputed to have made the classical subject-subjects statement when he said, "Love your enemies." Treat the person who is against you, perhaps even out to kill, as a subject, as someone deserving respect and care, as the Good Samaritan treated his enemy in need. The subject-subjects model is counter-cultural: it is opposed to the religion of Economism, to utilitarian thinking, to seeing the world as for me or against me.

Christianity is not easy religion. (41)

(4) ケアの倫理

- Caring は、人間形成＝教育 (Bildung) の問題となる。
- Nel Noddings, *Careing. a feminine approach to ethics and moral education*, University of

California Press, 2003(1984).

- ・川本隆史「ニーズを論じあることとは、どんな人間のつかりを創り出すのか——公共性と倫理」(安彦一恵/谷本光男編『公共性の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、2004年。)

<参考文献>

A. 言語学一般(隠喩論、宗教言語論、神学的言語論などの文献は別にして)

1. 言語論と現代哲学(とくに論理学・分析哲学の分野)
 - 飯田 隆『言語哲学大全』I(論理と言語)、II(意味と様相、上)、III(意味と様相、下)、IV(真理と意味)、勁草書房、1987～2002年。
 - 神野慧一郎編『現代哲学のフロンティア』(1990年)、『現代哲学のバックボーン』(1991年)、勁草書房。
2. 分析哲学から現代思想全般へ
 - 野家啓一『言語行為の現象学』(1993年)、『無根拠からの出発』(1993年)、『科学の解釈学』(1993年)、勁草書房。
3. 解釈学的哲学(ドイツ哲学の言語論)
 - ガダマー『真理と方法 I II III』法政大学出版局。
 - 麻生 建『ドイツ言語学の諸相』東京大学出版会。
 - 塚本正明『現代の解釈学的哲学』世界思想社。

B: レトリック・メタファー・モデル

0. 芦名定道『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
 - 「現代思想とキリスト論」、水垣渉・小高毅編『キリスト論論争史』2003年、日本キリスト教団出版局、pp.529-567。
1. Paul Ricoeur :
 - a. La métaphor vive, Seuil, 1975.
 - b. "Biblical Hermeneutics (Semeia. 4, the Society of Biblical Literature)," 1975, pp.27-148.
 - c. Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning, The Texas Christian University Press, 1976.
 - d. "Listening to the Parables of Jesus," in: Charles E. Reagan, David Stewart (ed.), The Philosophy of Paul Ricoeur. An Anthology of His Work, Beacon Press, 1978.
2. Sallie McFague, Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age, Fortress, 1987.
3. Paul Tillich, Systematic Theology, Vol.1-3, The University of Chicago Press, 1951/57/63.
4. George Lakoff and Mark Johnson, Metaphors We Live By, The University of Chicago Press, 1980.
 - George Lakoff, "The contemporary theory of metaphor," in: Andrew Ortony (1993), pp. 202-251.
 - ジョージ・レイコフ、マーク・ターナー『詩と認知』紀伊國屋書店、1994年。
5. Andrew Ortony (ed.), Metaphor and Truth (Second Edition), Cambridge University Press, 1993.
6. Janet Martin Soskice, Metaphor and Religious Language, Clarendon, 1985.
7. William Schweiker, Mimetic Reflections. A Study in Hermeneutics, Theology, and Ethics, Fordham University Press, 1990.
8. 佐々木健一編『創造のレトリック』勁草書房。
9. 佐藤信夫『レトリック感覚』、『レトリック認識』、『レトリックの記号論』講談社。

10. 瀬戸賢一『レトリックの宇宙』海鳴社、『レトリックの知』新曜社、『認識のレトリック』海鳴社、『認知文法のエッセンス』（ジョン・R・テイラーとの共著）大修館書店。
11. 上田閑照『西田幾多郎を読む』岩波セミナーブックス。
12. Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.
13. Manfred Kaempfert (hrsg.), *Problem der religiösen Sprache*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1983.
14. Reinhold Bernhardt, Ulrike Link-Wieczorek (Hg.), *Metapher und Wirklichkeit. Die Logik der Bildhaftigkeit im Reden con Gott, Mensch und Natur*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1999.
15. 小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。
16. Susan A. Handelman, *The Slayers of Moses. The Emergence of Rabbinic Interpretation in Modern Literary Theory*, State University of New York Press, 1982. (スーザン・A. ハンデルマン『誰がモーセを殺したのか』法政大学出版局、1987年。)
17. Ora Wiskind Elper and Susan Handelman (ed.), *Torah of the Mothers. Contemporary Jewish Women Read Classical Jewish Texts*, State University of New York Press, 2000.
18. James K.A. Smith, *Speech and Theology. Language and the logic of incarnation*, Routledge, 2002.
19. Philip Burton, *Language in the Confessions of Augustine*, Oxford U.P., 2007.
20. 武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュストモス』教文館、2004年。

C: 聖書学・イエスの譬え

1. Peter Stuhlmacher, *Vom Verstehen des Neuen Testaments. Eine Hermeneutik*. Göttingen, 1986.
2. G.R.Evans, *The Language and Logic of The Bible. The Road to Reformation*, Cambridge Univ. Press, 1985.
3. G.R.Evans, *The Language and Logic of The Bible. The earlier Middle Ages*, Cambridge, 1984.
3. Gerhard Ebeling: *Evangelische Evangelienauslegung*, Tübingen 1991, (1941).
4. Ernst Troeltsch, "Ueber historische und dogmatische Methode in der Theologie," 1900 (GS.2).
5. Wolfhart Pannenberg, "Heilsgeschichte und Geschichte," 1959, "Die Krise des Schriftprinzips", 1962, in: *Grundfragen systematischer Theologie 1*, Göttingen, 1979.
6. Paul Ricoeur: *The Reality of Historical Past (The Aquinas Lecture. 1984)*, Marquette Univ. Press. 1984.
7. Eduard Schweizer, *Luke. A Challenge to Present Theology*, John Knox Press, 1982.
8. Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt, 1976 (1888 / 1899).
9. Joachim Jeremias: *Die Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1984 (1947).
10. Walther von Loewenich: *Luther als Ausleger der Synoptiker*, München, 1954.
11. Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Göttingen, 1979 (1921).
12. C.H.Dodd, *The Parable of the Kingdom*, New York, 1961 (1935).
13. Eta Linneman, *Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1978 (1961).
14. Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus*, Tübingen, 1979 (1962).
15. Archibald M. Hunter, *The Parables Then and Now*, Westminster Press, 1971.
16. Robert H. Stein, *An Introduction to the Parables of Jesus*, The Westminster Press, 1981.

17. Robert W. Funk, *Language, Hermeneutic, and Word of God*, New York, 1966.
 , *Parables and Presence*, Fortress, 1982.
 The Good Samaritan as Metaphor
18. Dan Otto Via, *The Parables. Their Literary and Existential Dimension*, Fortress, 1967.
19. John Diminic Crossan, *In Parable. The Challenge for the Historical Jesus*, New York, 1973.
20. Amos N. Wilder, "An Experimental Journal for Biblical Criticism. An Introduction," in:
 Semeia 1, 1974.
 , *Jesus' Parables and the War of Myths*, Fortress, 1982.
21. Norman Perin, *Jesus and the Language of the Kingdom*, Fortress, 1980 (1976).
22. Daniel Patte, *What is Structural Exegesis?*, Fortress, 1976.
23. Paul Ricoeur, "The Language of Faith / Listening to the Parables of Jesus," in: Charles E.
 Reagan and David Stewart (eds.), *The Philosophy of Paul Ricoeur*, Beacon Press, 1978.
24. Gerhard Sellin, "Allegorie und Gleichnis," in: *ZThK* 75, 1978.
25. Aurel von Jüchen, *Die Kampfgleichnisse Jesu*, München, 1981.
26. Wolfgang Harnisch (hrsg.), *Gleichnisse Jesu. Positionen der Auslegung von Adolf Jülicher bis
 zur Formgeschichte*, Darmstadt, 1982.
27. Herman Hendrichx, *The Parables of Jesus*, Harper & Row, 1983.
28. Hans Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, Göttingen, 1984.
29. Martin Petzoldt, *Gleichnisse Jesu und christliche Dogmatik*, Göttingen, 1984.
30. Wolfgang Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, Göttingen, 1985.
31. Robert W. Funk, Bernard Brandon Scott, James R. Butts,
 The Parables of Jesus. Red Letter Edition. The Jesus Seminar, California 1988
32. Robert Winterhalter with George W. Fisk., *Jesus' Parables. Finding Our God Within*,
 Paulist Press, 1993.
33. William R. Herzog II, *Parables as Subversive Speech*, Westminster / John Knox, 1994.
34. Eduard Schweizer, *Jesus, das Gleichnis Gottes*, Göttingen, 1996 (1994).